地方だより

紋別測候所

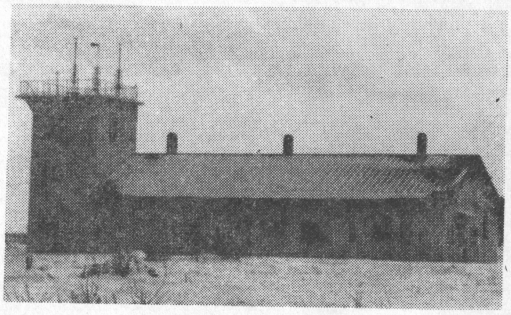
北の海オホーツク海岸線の中ほどにある当所は昭和31年1月に誕生し今年で満6才を迎えました．最近ファックスと発動発電機の整備が完了したばかりで職員一同喜びのうちに業務に励んでいます．

当市は明治初年少数の漁業経営者により部落が形成され同13年戸長制度がしかれ，それ以来今日の人口4万余の漁港に成長した町ですが近年は北洋漁業基地としてまた近海漁業の操業基地として漁期には500隻を越える漁船が集結し発展途上にある活気に満ちた港町です．

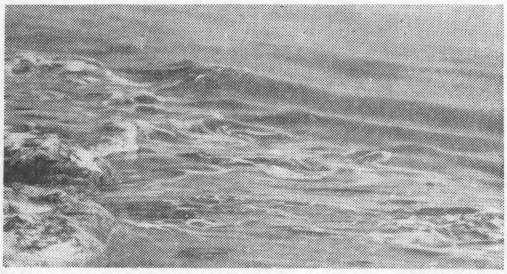
したがってわれわれの業務も漁業対称サービスが大きく取り上げられます．特別なものとしては海氷予報があります．この仕事は最初資料がなく困つたものですが，数年前から航空機によって海氷の観測調査が行なわれており，漁場付近の状況や沿岸水路の有無も速報されるようになり船舶に対するサービスが飛躍的に向上しつつあります．

冬期間は沿岸結氷と流氷の来襲で漁業は中止され船は陸に上架され氷海の明けを待つて冬眠に入るのですが，最近はこの冬眠期間の短縮が計画されており漁場付近が開水面となれば氷域操業が実施されつつあります．砕氷群の中を10隻20隻と1例縦隊になつた漁船がありの進みにも似た速度で漁場に航行します．時には砕氷群の密接度が増大し帰港不能となつて巡視船が水路開発の世話をすることもしばしばあります．こうした危険を冒して50トン級の漁船が1日50万円前後の水揚げをしています．

さて北の漁港とはいえ市として文化施設は保持されていますし，夏期は30°Cを越え米作地域やリンゴの産地も周辺にあります．厳寒期は氷雪の町と化しますが−20°Cを下ることは珍らしく寒い北海道としては恵まれた地方といえるところです．　（斎藤　寛）

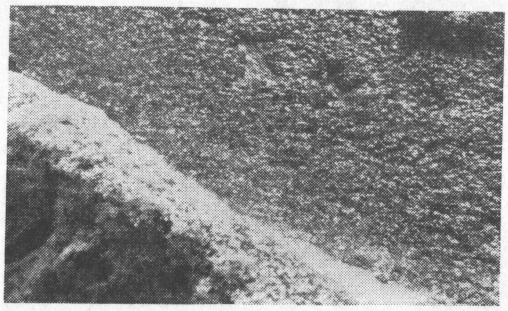


初冬の紋別測候所全景



1月初旬になれば沿岸には泥氷が発達し油を流した様な状態となる

氷域操業で自力航行不能となり巡視船が水路開発中（3月中旬）



泥氷が岸に打上げられ海水が引いて寒気のため凍結しはじめたところ（1月初旬）